

さくら長屋の回覧ノート

ミラ Mira



アルファポリス文庫

第一章 惜春、『さくら長屋』

家族がいなくても。

友だちがいなくても。

結婚なんて、しなくても。

生きていける。

なくとも大丈夫なもの。

それは結局、全部——無駄ではないか。

家事、仕事、人間関係。

私、橘百花は何においても無駄のない暮らしを選び続けてきた。

そんな私の暮らし方にびたりと当てはまる言葉に出会った。

それが「タイムパフォーマンス」。

通称タイパ。

より短い時間で、より高い利益や満足度を上げることが「タイパが良い」と私は解
釈している。

オンライン会議で移動時間を省き、動画の倍速視聴でより多くのコンテンツをのみ
込み、冷凍食品を使い調理時間を削ぐ^そ。

全て、タイパ良し。

時間の無駄を削ぎ落とし、シンプルに、必要なことだけを粛々と^{しゅくしゅくと}。

そう生きていけば効率的で、気持ちが良い。

ベッドと一人用のテーブルだけのワンルームマンションで、一人きりの二十一時を
迎えた金曜日。

私はベッドに寝転び、スマホを見つめる。

ニュースの要約を眺め、ショート動画を見て、五分で泣ける小説を読み終わると、
スマホに家計簿アプリから通知が届いた。

『お誕生日、おめでとうございます』

無味無臭な文字列のお祝いをぼんやり眺める。

電気を消した真つ暗な部屋に、スマホのブルーライトだけが光っている。ブルーラ
イトに照らされた私の顔は青白いことだろう。

「……三十二歳か」

今日、私を祝ったのは、この息をしない文字だけ。

自らなんの祝いもせず、もうベッドで就寝するところだ。

誕生日は特別だという風潮がある。

だが、本当はただの金曜日なのだから、淡々と過ごせば無駄がない。

私はスマホの画面を消してベッドの端に置く。

目をつむって、眠ると決めた。

だが眠ろうとしている時に限って、思い出すのは元カレの声だ。

ざわつく喫茶店で聞いた彼の声が、私の耳の中で再生される。

『百花といると……息苦しいよ』

カッンとテーブルに置かれたコーヒーカーップの硬い音まで鮮明に蘇る。

あれは、決別の音だった。

ついで一週間前、私は彼氏にフラれたのだ。

寝返りを打つてもなかなか眠れず、婚活三連敗の軌跡^{きせき}を振り返ってしまふ。

社会人になったばかりのころから、落ち着いたら結婚しようと思っていた。

結婚という制度は、事故に遭ったり病気になるったりしたときのリスク管理、生活基
盤の安定といった点でメリットが多い。

なぜ結婚しないのかと聞かれるような煩わしさがなくなり、既婚者、という明確で体裁の良い社会的地位が手に入る。

よくできたライフスタイルだ。

病気で亡くなったお母さんも、

「一人でいないで、幸せでいてね」

と願ってくれていた。

お母さんを見取り一人きりになった三十歳のとき、ついに婚活を始めた。

最初から自由恋愛の選択肢を捨て、結婚相談所に飛び込んだ。

私は中肉中背、ややつり目の平凡顔だ。

健康で、正社員として働いている。

高望みをしなければ結婚できると相談所には判定され、担当者との面談で私は言った。

「私が結婚相手に求める条件は『自立していること』だけです」

容姿や収入に要件はつけなかった。

相手が一人で立ち、私も一人で立っていれば問題がない。

私の平均的な年収や平凡な容姿、求める条件がちょうど良いのか、見合い相手に事欠くことはなかった。

だが私には一つ、大きな欠点がある。

「あの……私はどうしても話すのが遅くて」

「ご心配には及びません。私の方から先方にお伝えして、事前に了承をいただきます」

担当者は微笑み、すぐに見合い相手を手配した。

そうして出会ったのが、一人目の彼氏。

彼は私が話すのを待ってくれる人だった。

「三か月の交際を経て、相性が良ければ婚約へ進む」という相談所の取り決めに従い、交際を始めた。

私は口下手なりに、できる限り私の意見を伝えようと努力した。

『温泉旅行に行かないか、ですか？ 近くの温泉施設に良いところがあるようですよ』

『手料理を食べたいと言ってもらえるのは光栄です。でも私の素人料理より、外食の方が満足度は高い気がするのですが……』

『これといって欲しいものがないので、デート記念のお土産購入は遠慮させてください』

これらの言葉は私が発した瞬間に、彼の眉がひそめられた例だ。

私は、彼の気を悪くさせたのだろう。こういうことがあると、その後のデートで、交際相手は決まってカッソとコーヒーカップの音を立て、私に別れを告げる。

という事態を「三回」も繰り返し、今日に至る。

三人の元カレたち。

どの彼も追いかける気は起きなかった。

私が悪いのだろうなとなんとなくはわかっている。

でもタイプ主義を捨てたら、私の心もつと傷だらけになってしまいうから。

どうしても譲れなかった。

私はもう、結婚できないと悟った。

だから三人目の彼氏と別れたとき、結婚相談所は辞めて、決意したのだ。

もう一人で生きていこう。

そうすれば、私が一番満足するタイプの良い暮らしができる。

私の最適解は「おひとり様」だ。

働いて税金を納め、自分のことは自分でやっていく。

誰の迷惑にもなっていない。

一人できちんと幸せになろう。

そう決めたのなら、効率的な目標はもう、決まっている。

「ハッピーバースデー、おひとり様の私。がんばろう、老後の貯蓄二千万円」

ベッドで身体をぎゅつと抱きしめて丸くなり、資金計画を考えながら眠りに落ちた。



惜春の香りが乗った風を受けて、北鎌倉駅のホームに降り立った私の短い髪が靡く。

線路を渡り、古い木造駅舎の北鎌倉駅をさつとあとにした。

大観光地である鎌倉よりも緑豊かで、静かに寺院と交わる北鎌倉。

凜と佇む寺院の景観が有名だが、大通りから一本外れれば、長閑な暮らしがある。

日本家屋や新興住宅が交わり立つ住宅地の中、私は急な石の坂を上っていく。

石坂の両側に桜木が立ち並び、瑞々しい緑葉が重なり合いトンネルになっている。

春爛漫の季節ならば、見事な桜トンネルとなるのだろうか。

「毛虫、落ちてきませんように」

私は頭を守りながら、さつさと坂を上りきる。

老後貯蓄二千万円に向けて動き出した私は、転職と引越しを決めた。

家賃という最大の出費を減らすために、北鎌倉で安い家を探したのだ。

「北鎌倉駅から徒歩二十分。桜トンネルを上りきった先」
しばらく道沿いに進むと『さくら長屋』へ到着した。

古長屋を眺めて声をこぼす。

「今日からここが、私の新しい家……」

『さくら長屋』は築五十年になる木造長屋だ。

長屋は五戸で、私は角部屋である。

羊羹色の木の壁、重厚な青瓦屋根。

風情があると言えば聞こえは良いが、ボロさは否めない。

長屋の玄関の前にある庭には、青紫色が鮮やかな花が植えられていた。

「ネモフィラ、だったかな」

長屋には園芸が趣味の人がいるようだ。

私なら手を出さない、時間を食う趣味だ。

建てつけの悪い引き戸をガラガラと開けて私の部屋に入る。

畳部屋が二つ奥に向かって並ぶ空っぽの部屋を見渡した。

もうすぐ引越し業者が来る予定だ。

「まあ、家賃三万五千円なら充分かな」

古い小綺麗で、この安さなら破格だろう。

だが、破格の家賃には古さ以外にも理由があった。

この物件には一つ、変わった入居条件がついているのだ。

北鎌倉駅前にある昔ながらの不動産屋で、資料を手につぶやいたことを思い返す。

「入居条件は『回覧ノートが続けることができる人』ですか？」

私はデスクの向こう側に座る、不動産屋の若いお兄さんに訊ねた。

彼は笑顔で回答する。

「『さくら長屋』の大家さん、桜井さんのこだわり条件で。回覧ノートが回ってきたときに、一言だけ書き込むそうです。回覧板のノートバージョンですね」

「回覧板ってテレビでしか見たことがないですけど……」

「マンション暮らしだと、そういう人も多いですよ。家のポストにノートが届くので、中を確認して書き込み、次の家にポストするってことです」

手早く説明した彼は、さらに続ける。

「こういう変わった決まりがある物件は、近所付き合いが濃い傾向にありますが、その点はいかがですか？」

お兄さんの指摘は的を射ていた。

近所付き合いをするほど時間を持て余してはいない。けれど、回覧ノートに少し書くだけでこの家賃は、何より魅力的だった。家賃の削減は、貯蓄に一番効果がある。

「大丈夫です」

私は契約を決めた。

契約書に記入する間も、お兄さんにはこやかに語る。

「『さくら長屋』の大家さんは、この回覧ノートのおかげで隣人だった奥様とご結婚したそうですよ。縁起が良いですよね」

結婚を諦めたばかりの私には、お得な情報には聞こえなかった。

お兄さんは私が記入した書類を確認しながら話し続ける。

「『さくら長屋』は古いので、長らく新しい入居者がいなかったんです。けどね、今まで入った人たちは不思議と誰も出ていなくて、定着率が高いです」

お兄さんはぼつりぼつりとしか返事をしない私に、ずっと愛想よく話しかけてくれた。

「ずっと営業トークだと思って聞き流していたが、もしかして、ただの話し好きなのだろうか。」

契約書類の封筒を私に手渡して、お兄さんは立ち上がった。

「きつと、『さくら長屋』には住んだ人にしかわからない、居心地の良さがあるんだろうなって、思ってます。新しいお部屋で、良い暮らしができますように」

「あ……ありがとうございます」

お兄さんの明るい笑みを受けて、古い不動産屋をあとにする。

ちらりと振り返ると、彼は店の前で私に手を振っている。

仕事だから誠実に接しただけだとわかっていても、新生活にエールをもらうとくすぐったかった。

時間通りに引越し業者がやってきて、荷物の運び込みが終わった部屋で、私はさっそく荷ほどきを始めた。

たった五つの段ボールの中身を押し入れに片づけ、がらんとした畳部屋に掃除機をかけ、最後に壁時計を手取る。

一分ごとにきつちりラインが刻まれた、機能性重視の壁時計は私のお気に入りだ。時計を設置し終えて、部屋を眺めた。

「引越し作業終わり。無駄ナシすつきり！」

やるべきタスクが滞りなく終わるのは、何より良い気分だ。

人生の手綱をきちんと握っている感触がする。

新しい部屋の簡素さを眺めてふっと笑った。

「何もない部屋、良いよね」

玄関に近い手前の畳部屋には、一人用のテーブルセット。

奥の畳部屋にはベッドだけだ。

ソファもテレビも、雑貨もない。

物が少ないと片づけ、物の管理、掃除に時間がかからなくて良い。

「ちょっと休憩っと」

Tシャツとジャージというラフな恰好で、掃除したての畳に寝転がる。

砂壁はぼろぼろはがれて、古ぼけた木の天井には染みが多数あって、台所の床はたわんで歩けば軋む。

古い家であることをしみじみと感じる。

「でも意外と、日当たりは悪くない」

古壁で囲まれた部屋だが、角部屋なので外に面した窓からは明るい陽が差していた。

開け放した窓からは、ぬるい風が吹き込んだ。

寝転んで日向ぼっこしながら、深く息をつく。

引越しが終わって、ぼんやりとこれからのことを思う。

新しい職場は、どんなところだろうか。

「今度はうまく働けるかな……」

老後貯蓄二十万円のために、転職した。

この数字情報は古く、すでに政府も否定した指標だ。

だが、私の日々の生活から換算すると割とリアルな数字だと思って、心に留めていた。

私が安心して老後を過ごすため、当面の目標としては採用できる。

二十万は遠い。

着実に稼いで、堅実に貯めていかななくてはいけない。

しかし、私は働くのに向いていないことが、経験上わかっている。

大学を卒業してから、保険営業補佐や不動産事務、学校事務と転職してきた。

仕事のことを考えていると、私の耳に嫌な声が次々に蘇る。

『橘さん、なんとか言ったらどうなの？』

職場でそう睨まれたことは数えきれない。

私は職場で常に力が入っていて、過度に緊張してしまふのだ。

そんな状態でお客さんや同僚に不機嫌をぶつけられたり、威圧的に振る舞われたりすると、口を縫われたように何も言えなくなってしまう。

『黙っていれば、周りがなんとかしてくれると思ってるんだ？』

私の黙り込んでしまう性質は、プライベートではまだマシで、お店でのちよっとしたやりとりなどは問題ない。

それに一人でやる仕事なら、効率的に淡々とこなせる自信がある。事務処理作業自体に文句をつけられることはほほえないのだ。けれどいつも最終的に、職場の人間関係が拗れてしまう。

『橘さんあなたの意見は？』

話しかけてもらうたび、頭では高速であらゆる答えを考える。

しかし私は「こう言う相手はどう思うか」を緻密に考えすぎて、どうしても口が重い。

回答に時間がかかってしまう。

私は相手が持っている見えない台本通りに、動けないのだ。

『わかった、話す気がないならもう良いわ』

そうやって沈黙を繰り返すうち、私は相手のストレス原因となってしまう。

中にはストレスを与えられた腹いせか、自分のミスを私に擦りつけようとする人もいる。

そういうときはあとで文書にまとめ、上司に報告した。

『あのときは何も言わなかったくせに、どうしてあとから難癖つけるようなことする

の？』

睨まれて、余計に反感を買ってしまう。

反応が鈍く、仕返しばかりするように見える私からは、自然と人が離れていく。

次第に仕事の報連相から漏れてしまい、終いにはトラブルが起こる。

『橘さんと一緒の仕事、なんかしんどいよね』

『ほんつと愛想がないんだもん』

『私らのこと心の中では見下してんじやない？』

遠巻きにされるくらいなら良いが、敵意の言葉が聞こえ始めると、私はもう耐えられない。

結局はどの職も、三年で限界がきて転職した。

私を責める声は何年たっても褪せず、幾度も蘇り、私を傷つける。

職場を辞めて、引越越した今でもこうやって思い出すくらいだ。

「人間とのやりとりだって効率的に、最小限にできたら……良いのになあ」

私は日向ぼっこをしながら、窓の外の青い空へ向かってつぶやいた。

結婚は無理で、稼ぐのも苦手だ。

二十万円はコツコツ節約して貯めていく。

真面目なことしか取り柄のない、私らしいやり方だろう。

「そろそろ、配達来るかな」

このあとは、私が毎晩食べる冷凍おかずの配達の前定が入っている。壁時計を確認すると、コンコンと玄関の引き戸がノックされた。

「はい、今行きます」

立ち上がった私は、戸をガラガラ開ける。

明るい陽が差す玄関前には、背の高い男性が立っていた。

荷物を手にしておらず、配達のエニフォームでもない。彼はにこりと笑う。

「初めまして。俺は隣の部屋に住んでる安芸（あき）つていいます」

予想外の訪問客に、私は身を硬くする。

背が高くてひょろとした彼を見上げる。

癖のある黒い前髪の間から覗く、細くて切れ長の真つ黒な瞳が印象的だ。

土で汚れた白いシャツと軍手から、むっと土の匂いがする。

「ガタガタ音がしてたから、引越してきたんだなって思って。挨拶に来たんだ」

「お、お隣さん……」

こちらから挨拶に向くところを、先手を打たれてしまって戸惑う。

うろたえながらも、なんとか名乗る。

「……橘百花です」

ここでにこやかに、「こちらから挨拶に伺おうと思っていました」と言えたら、愛想が良いのだろう。

でも私は、言葉が出なかった。

音で引越してきたと知られて、居心地が悪い。

やはり長屋となれば、壁も薄くてプライバシーもないものだろうか。

土に汚れた安芸さんは、玄関前の右斜め下を指差した。

彼はニツと、八重歯（やえば）を見せる。

朗らかで人に好かれる笑い方だ。

「それ、引越し祝いのプレゼント」

「それ……?」

私は玄関から顔を出し、斜め下へ視線を落とす。

すると、何もなかったはずの場所に、小さな白色の植木鉢が置かれていた。

「朝顔の種を植えておいたから。毎日をじゃってかけるだけで勝手に育つよ。小学一年生でも育てられるから簡単！」

親切心が滲み出るように笑う安芸さんに向かって、私は目をしばたいた。

引越し祝いに、植木鉢を贈る人なんているだろうか。

どうしよう。

確実にいらぬ。

園芸なんて、時間ももつたない。

断らなくてはと思うのだが、断ったらどう思われるだろう。

「はいこれ、どうぞ」

安芸さんが軍手を取って、脇に挟んでいたノートを私に差し出してきた。手が反射的に受け取ってしまった。

A5サイズの桜柄ノートだった。

「これ、回覧ノート。入居条件は聞いてるよね」

「は、はい。でも、まずこの……」

「今日は最初だから、大家さんにノートを渡すの頼まれたんだ。ノートが回ってきたら、書き込んで回してね。次は俺」

私の部屋は角部屋なので、反対側の端の部屋の人がわざわざ回覧ノートを運んでくるらしい。

だが私は回覧ノートよりも、植木鉢が気になって仕方ない。

安芸さんは話のペースが速い。

ついていかなくては。

「か、回覧ノートについてはわかりました。それで」

「最初は書くことに悩むだろうから、一緒に考えよっか」

私の言葉を遮って、安芸さんは回覧ノートをパラパラとめくりながら人懐っこく笑う。

「なんでも良いんだけど、お題とか出す？ そうだな、たとえば……」

ああもう、悪意がないのが透けて見える。

人との距離が最初から近い人なのだろう。

私と特に相性が悪い。

こういう人は自分が満足するまで話さないと、こつちの話を聞かない。

「好きな言葉って何？」

あ、それなら言える。

私は私の中で答えが決まりきっていることなら、素早く答えられる。

「好きな言葉は、タイパです」

ようやく、安芸さんと一つ会話が成立した。

ノートをめくっていた安芸さんは手を止めて、顔を上げる。前髪の間から細い目がきよとんとこちらを向く。

やっと、止まってくれた。

「へえ、タイパ。よく聞くやつだ。今時って感じだね」

安芸さんはくすつと笑って、開いたノートを私に見せて「ここから書いてね」と説明した。

そのくすつと笑いが妙に癪に障る。

鼻で笑われたような気がしたからだ。

私はいつだっとうやあって、相手の気持ちを過剰に勘繰ってしまふ。勘違いかもしれないとわかっている。

でも止まらないのだ。

植木鉢のプレゼントでいらつとしていたうえに、さらにモヤツとしたものが積みあがる。

なのに、口は動かない。

「タイパって言い始めるとさ」

安芸さんはニツと八重歯を見せて、またはきはきと話し始める。

「生きてることが一番、タイパ悪い気がしない？」

私は頬をぱちんと叩かれたように呆氣にとられた。

安芸さんの言葉をもう受け取りたくない。

なのに、私の耳は一言一句逃すまいと彼の声を捕らえてしまう。

「死ぬまでが人生だから。あつという間に終わらせた方がタイパが良いって話になつ

たらどうしようって、思っちゃうんだよね」

ハハツと明るく笑い飛ばした安芸さんは、軽く手を振って、「またね」と隣の部屋に入ってしまった。

私は玄関に取り残され、わなわなと唇を震わせる。

タイパに対して、そんなに辛辣なことを言われたのは初めてだ。

しかも少し核心をついたような意見で、反論が浮かばなかった。

「明るく言えば、なんでも許されると思って……」

ああいう人といると、ささくれ立つ。

彼にとっては他愛ない世間話だっただろう。

きつと明日にはもう自分の言葉すら忘れていて、私だけがモヤモヤし続けるのだ。

私は玄関前に置き去りにされた白い鉢をキツと睨んだ。

結局、植木鉢を持って帰ってほしいと言えなかった。

安芸さんに一言も、言い返せなかったのが悔しい。

「……君にお水なんてあげないから」

私は安芸さんに言えなかった分のいらいらを植木鉢に吐き捨ててから、扉を勢いよく閉める。

植木鉢を蹴とばしてやろうかと思ったのに、結局、そこまではできなかった。

安芸さんの突撃訪問のあと、宅配便が届いた。定期的に自動配送されるよう手配した、冷凍おかずのセットである。冷凍おかずは電子レンジで温めるだけで簡単、おいしい、栄養満点だ。本日のメニューは和風ハンバーグに人参とコーンのソテー、そしてほうれん草のお浸し。

「こんな彩り豊富な食事なんて、毎回作れないからね。うん、今日もまあまあおいしい」

一人用のダイニングテーブルで、冷凍おかずと白ご飯の夕食を口に運ぶ。ついでに、テーブルに置いていた回覧ノートをばらばらとめくってみる。

「これが、回覧ノートか」

ノートに触れると、晴れやかな安芸さんの声が蘇る。

『あっとい間に終わらせた方がタイプが良い』

「あー……まただ……」

以前にネットで調べたところ、何度も嫌なことを思い出すのは防衛本能だそうだ。自分を脅かす危険を忘れるな、という合図だという。

嫌な言葉を聞くのは一度で良いというのに、迷惑な機能だ。

頭を振って声を追いついてから、回覧ノートの一番新しいページを読む。

さっそく安芸さんの書き込みが見えて、口の端が引きつってしまった。

『花がナメクジに襲われ続けらる。／去年育てた朝顔の種、植え始めた！ 安芸』

「ナメクジのことを書くんだ……」

どうやら回覧ノートは「心に引っかかること」と、「良かったこと」を一つずつ書く、ひとこと日記のようだ。

「朝顔の種、安芸さんが育てたやつなんだ……歴史知っちゃったー、もうー」

私はノートの前で項垂れる。

ますますあの植木鉢を返品できなくなってしまった。

ため息をつきつつ、他の人の書き込みも確認する。

私もこの『さくら長屋』に住む条件として、回覧ノートを書くのだ。

もつと実例を知っておきたい。

『ツツジの花の掃除が大変。／今週は孫にフライドポテトを揚げる。時雨』

『カレンが帰ってくれない。／推しのイベントが来週に迫る！ ユリ』

『夫の入院はまだ長引きそうです。／新しい方の人居が決まりました。里子』

『宿題イヤ。／おばあちゃんのしゃりしゃりリンゴジャムぜんぶ食べた。めぐる』

「長屋は五世帯って聞いていたけど……私も入れて住民は六人か」

宿題という単語と文脈の軽さから、めぐるちゃんは小学生だろうか。里子さんとめぐるちゃんの書き込みが、寄り添うように書かれている。

「この二人はおばあちゃんと、孫かな」

達筆な筆跡から見ると、時雨さんは年配のようで、ユリさんは「押し」という言葉を使っているのでおそらく若い方だろう。

「回覧ノート、意外と情報が多い」

ノートを読んだだけで、この『さくら長屋』にどういう人物が住んでいるのかを大まかに把握してしまった。

「一人ひとりに自己紹介を受けるより、効率が良いよね」

今まで、隣に誰が住んでいようと気にしない、東京都心で暮らしてきた。

だが、この直筆の回覧ノートからは、長屋に暮らす人の気配が濃く感じられる。

SNSのようなスマホ画面の向こうの全く知らない人ではなく、同じ屋根の下の長屋に住む、身近な人たちの声だ。

なんだか興味が湧いてしまう。

特に気になるのが、ユリさんの書き込みだ。

「カレンが帰ってくれないって……カレンって誰だろ」

回覧ノートを前の方まで遡り、読んでみる。

カレンさんという人は定期的に、ユリさんのところにやってくるようだ。

カレンさんの来訪は「心に引っかかること」として書かれている。

つまり、ユリさんにとってしんどいことなのだ。

私は夕飯を食べるのも忘れて、回覧ノートを読みふけた。

「カレンって名前からして女性だろうけど、友だちかな。苦手な友だちが定期的にやってくるなんて……それは辛い」

ユリさんの心情を慮って、共感までしてしまう。

「それにこれ、誰かの書き込みに返事とか書かないんだ……これなら私にもできそう」

人とのやりとりが重く感じてしまう私にとって、ノートに言葉を置くだけで良いのは、気軽だった。

私はペンを持って、初めて回覧ノートに書き込んだ。

『朝顔の世話が、できそうにないです。／部屋の片づけが終わりました。百花』
書き込んだ文字を眺めてみる。

「嫌味っぽいかな……でも返信はしないみたいだから、まあ良いか」

安芸さんに口ではどうしても言えなかった。

けれど、心に積んでいたものをそこに書くと、少し気が楽になる。

「これで安芸さんが私を遠巻きにしてくれたら、正直助かる」
私は翌朝、隣の安芸さんのポストにノートを回した。



五月を迎え、赤い自転車で桜若葉のトンネルを走り抜けた。
自転車で十五分走り、住宅街からやや離れた山の麓にある施設へ、今日は初出勤だ。
薄卵色をした壁色が印象的な、平屋の建物が私の新しい職場である。

ここは北鎌倉の障害者の方たちが働く作業所だ。

箱の組み立て、タオル畳みなどの軽作業や、鎌倉野菜の栽培などを行っている。
私の仕事は、作業所を運営するための請求手続きや給与計算などの、事務作業だ。
作業所に入るとすぐに、六十代くらいの女性が明るく声をかけてくれた。

「橋百花さんね。待ってたわ！」

「よろしくお願いいたします」

「式田です。こちらこそよろしくね」

豊かな白髪を一つにまとめて、すっきりと清潔感がある式田さんが口角を上げる。
口元に大らかな笑い皺がある人は、私でも声がかげやすい。

「さっそく事務室に案内するね」

式田さんについて、大きな窓が並ぶ明るい廊下を突き当たりまで進む。

「ここが事務室ね。ちよっと小さいけど、ごめんね」

こぢんまりとした部屋に一つだけのデスクとパソコン、鍵のかかった資料棚がぎっしり置かれている。

「事務室ってぼつんと離れ小島だから、寂しいときはいつでもみんながいる談話室に顔を出してくれて良いからね」

式田さんが事務室の窓を開けながら、私に笑いかけてくれる。

私は軽く会釈を返した。

式田さんの大らかな対応にほっとする。

「じゃあ、どんどん仕事を教えるね！」

作業所の朝のミーティングで利用者さんたちに紹介してもらったあと、式田さんか
ら初心者の中でもできる仕事をもらった。

「私は支援員として現場に出ているから。困ったらいつでも相談して」

式田さんはそう言い残して事務室を出た。

事務室で一人きり、パソコンに向かって地道な打ち込み作業が始まった。
福祉分野の仕事は未経験だ。給料も高くない。

だがメリットが多い仕事だと思って志望した。障害者福祉業界は近い将来、AIに仕事を奪われる可能性が低く、利用者さんに合わせて稼働するために残業がほほない。

定時で仕事が終わるならば、ダブルワークで収入アップも考えられる。「ああ、こうより……こっちの方が早いな」

自分なりの効率を突きつめながら、淡々と作業を続ける。

遠くでざわつく人の声がたまに聞こえるくらいなので、事務室は静かで快適だ。

もしかしたらここは、私に合った職場かもしれない。

そんな高揚感こうやうなを覚えつつ、軽快にパソコンのキーボードを叩く。

だが、私の集中を遮るように、ノックもなく事務室のドアが開いた。

「入るよー」

ふっと顔を上げると、髪の毛の薄い五十代くらいの男性が立っていた。

首から垂れたネームタグを見ると「沼倉ぬまぐら」と書いてある。

作業所で働く利用者さんのようだ。

ジャージ姿の沼倉さんがへつと笑うと、下の前歯が一本抜けているのが見えた。

「おう、新人のお姉ちゃん！ 名前はえつと……？」

「橘百花です」

「あーそうそう、橘のタッチーね！ 俺はここ長いから、なんでも聞いてくれよ！」

タッチー、いきなりのあだ名呼び。

そういう距離のつめ方は、私の苦手分野だ。

だが、せっかく新人に気を遣ってくれているのに、やめてくださいとは言えない。

私は会釈してからまた、打ち込み作業に戻る。

「タッチーは何してるの？」

私のパソコンを覗き込むように、沼倉さんが私の背後に立った。

距離が近い。

沼倉さんの息遣いが耳元で聞こえて、ツンと汗の臭いがする。

私の周りの湿度が上がった気がして、背中の神経がぞわぞわする。

感覚が鋭敏になってしまふのを止められない。

「難しそうなこととしてすごいな！ 俺にはできないなあー！」

沼倉さんの声は明るい。彼はどこも触れず、褒め言葉を口にしてている。

それなのに私は、きゅっと唇を噛んだ。

「あ！ 沼倉さん、こんなところにいた！」

事務室へ軽快な足取りでやってきた式田さんのおかげで、息がつけた。

「さぼってないで作業してください！ あと箱が百個もあるんですよ！」

「あーごめんごめん！ シキちゃん！」
 式田さんに連れられて、沼倉さんは笑いながら出ていった。
 私は一人に戻った静かな事務室で、両手を握り合わせて額に押しつける。
 何もされてない。
 でも、しんどかった。

予定通り、定時で仕事を終えた。

まだ日が暮れないうちに、桜トンネルの急な坂道を自転車を押しながら上り、やっと『さくら長屋』にたどりつく。

部屋の横に自転車を止め、玄関の前で靴から鍵を取り出していると、後ろに気配を感じる。ゾワツとして振り向くと、安芸さんが立っていた。

土で汚れたTシャツを着た彼が、私に向かって軽く手を上げる。

「百花さん、おかえり。今、ナメクジ退治してただよ」

長屋の前の庭で安芸さんがナメクジと戦っているときに、私がたまたま帰ってきたようだ。

待ち伏せされていたわけではない。

「ナ、ナメクジ……」

背後へ立たれることに過敏になっている自覚はある。

けれど今はあまり、人に近寄ってほしくない。

だが、そんな事情を知らない安芸さんは、私に声をかける。

「仕事帰り？」

「……はい」

そういえばまだ「おかえり」に返事をしていない。

今さら、「ただいま」と言うべきだろうか。

「どんな仕事してるの？」

そんな馴れ馴れしい挨拶をするような仲ではないと思うが、と考えているうちに、次の質問だ。

作業所の名前を答えるべきか考えていると、彼が先に口を開く。

「あ、聞いちやダメなら良いんだけど！」

一步引いてくれた安芸さんが、今度は黙る。

私が会話についていけないせいで、ついに愛想の良い安芸さんも困らせてしまった。彼は先日の回覧ノートの『朝顔の世話ができそうにない』という書き込みを読んでいるだろう。

それに触れられたらと思うと、余計に口が重い。

やはりまた私より先に、安芸さんが沈黙を破る。

「……回覧ノートを読んだんだけど」

一番避けたい話題がきた。

耳を塞いで逃げてしまいたい。安芸さんはわずかに言い淀む。

「気が利かなくてごめん」

「え……」

安芸さんは癖のある黒髪を揺らして、私に小さく頭を下げる。

「言いくかかったよね。ノートで教えてくれて良かったよ。俺、気づけなかったこと

反省した。だから……」

私は目を丸くした。

まさか回覧ノートを読んで、植木鉢を引き取りに来てくれたのか。

「はい、これどうぞ！」

安芸さんは私に向かって、鮮やかな緑色で、ゾウの形をしたジョウロを手渡した。

小学生が好きそうな、遊び心のある造形だ。

私は呆然としながらもまた、手が勝手に動いてそれを受け取ってしまう。

「ジョウロがないと、世話できないよね」

安芸さんが笑うと八重歯が輝く。

「簡単だよ、とか言って道具の用意からさせるとか迷惑だったよね。ごめん」

「……い、いや、ちが」

「肥料とかも、またタイミング見て持っていくから任せてね！」

心配しないでと、彼は快活に笑う。

安芸さんの背後で、彼がナメクジから守っているネモフィラが揺れている。

回覧ノートの言葉を、こんな風に受け取られるなんて思わなかった。

緑のゾウの大きな瞳を見つめて言葉を失っていると、軍手を外した安芸さんがまた口を開く。

「この前さ、百花さんが好きだって言ってた、タイパについて調べたんだよね」
ぽかんと私の口が開く。

「……あんな会話……もう、忘れているかと」

「え、忘れないよ？ 俺には全くない考え方だったから面白いなと思って。動画で解説見たり、本もポチッチャったりしたし、いっぱい考えたよ」

ハハッと楽しそうに笑った安芸さんの顔を、傾き始めた夕陽が照らす。
私だけがモヤモヤし続けると思っていた。

けれど彼は、私の回答に興味を持ってってくれていたのか。

「でさ、考えた結果、やっぱり究極のタイパってのは……」

安芸さんがまた話し出したとき、彼のポケットの中でスマホが鳴った。アラームのようだ。

「あ、ヤバ。仕事行かなきゃ！ またね、百花さん」
彼は慌てて隣の部屋に帰っていった。

呼ぶなら苗字にしてほしい、と言ったら、どうして？ と延々と話が続くのだからもう、受け入れるしかなさそうだ。

私はやっと家に入り、手にジョウロを持ち続けていたことに気がついた。

「ジョウロを渡してくるなんて、話通じてなくて……苦手」

緑のゾウを靴箱の上に置いて、玄関を上がる。

「……でも」

立ち止まり、振り返って緑のゾウを見つめる。

「わざわざタイパのこと、調べてくれたんだよね……」

安芸さんに忘れられていなかったと知って、あゝのときの荒れた^あ気持ち^{やわ}が和らいだ気がする。

ゾウのつぶらな瞳と目が合って、思わず頬が緩む。

「安芸さんって、変わってる」

ぐったりしていた仕事帰りに、まさか笑えるとは思わなかった。



初出勤からしばらく経ち、作業所での事務仕事には慣れてきている。

式田さんの指導は的確で、質問のしやすい雰囲気もあるから助かった。

事務員は私一人で、一人っきりの作業環境に安心感もある。

気がかりな存在の沼倉さんは、週に一度、顔を合わせる程度だ。

この程度なら、なんとか我慢してがんばれそうだ。

その日、定時で上がった私は、今から長屋の住人たちに挨拶回りをしようとしていた。

遅くなってしまうが、仕事が落ち着き、やっと余裕ができたのだ。

挨拶用の手土産の洗剤を持って、私は自分の部屋の扉を静かに開けた。

近頃、部屋を出るときは人の気配を確認している。

「安芸さん、いませんように……」

園芸好きな彼は、長屋の前の庭にたびたびしゃがみ込んでいる。

彼は私を見かけると「いつてらっしゃい」「おかえり」と必ず声をかける。

親しげな挨拶にどう対応すべきか迷い、上手く返事ができない。安芸さんは悪い人ではない。

だが、少し押しが強いので、つい避けたくなる。

私は部屋を出て、隣の安芸さんの家の玄関前にぼんと洗剤を置く。

『引越してきました、橘百花です。よろしくお願ひいたします』
と、書いたメモを洗剤に添える。

同じように、他の家の前にも洗剤を置いた。

最後に、私の部屋と真反対にある端っこの家を訪ねる。

「里子さんは大家さんだから、対面でご挨拶を……」

『さくら長屋』の本来の大家は、ご主人の桜井さんの方だ。

だが私は、回覧ノートによって彼が入院中だと知っている。

今の『さくら長屋』を取り仕切っているのは桜井さんの奥さん、里子さんだ。

私は緊張しながら部屋の扉をノックする。

「こんにちは。里子さん、いらっしゃいますか」

しばらくしてドタドタと足音がして、引き戸が勢いよく開いた。

「はーい！」

玄関に立ったのは、黒髪を二つ括りにした少女だ。

短パンに短いソックスの健康的な姿から放たれる生気がまぶしい。

回覧ノートの書き込みから察するに、彼女がめぐるちゃんだらう。

「引越越してきた橘百花です。ご挨拶に伺いました」

「あ、あの百花ちゃん!? 回覧ノート読んだよ、会いたかったー！」

私が相手を知っているように、回覧ノートのおかげで相手も私を知っているのだ。

「桜井めぐるだよ！ よろしくー！」

めぐるちゃんは十歳くらいだろうか。

私が洗剤を渡すとすぐ受け取って、ありがと！ とにんまり笑う。

「百花ちゃんの場合は、モモちゃんって呼ぶねー！」

笑顔でぐいぐい距離を縮めてくるので驚くが、子どもだからか不思議と嫌な気にはならない。

彼女が動くたびに括った髪が揺れて、シャンプーの香りがする。

「モモちゃん、家が上がって！ 新入りさんとは仲良くしなきゃって、アキくんが言ってたからね。一緒にご飯食べよ！」

「いや、そんなわけには……！」

めぐるちゃんは私の手首をぱっと握って、玄関の中に引っぱった。

アキくんとは、安芸さんのことだろうか。

手を引かれてめぐるちゃんの家の玄関に入ると、夕飯の香りがする。カレースパイスと、炊飯器の蒸気から出る白米の香り。その両方が重なり合うと、ふっと抵抗する足の力が緩む。カレーを食べたいと思ってしまった。

「あとでアキくんも来るよ！」
「え、あ、帰りますす！」

安芸さんとは挨拶程度で苦戦しているのに、一緒に夕食なんてできない。私は過度に緊張する必要のない相手の前では、言葉がするつと出る。めぐるちゃんは子どもだし、全身から湧き出る生命力が可愛くて、緊張が薄れていた。

「えーなんで！」

「えっと、理由は……」

安芸さんが苦手だなんて、堂々と言えない。

頬を膨らませるめぐるちゃんと私は手を引っ張り合って、押し問答する。そんなことを続けていると、めぐるちゃんの後ろから老婦人が現れた。

「こら、めぐる、離しなさい」

「だっておばあちゃん」

「しつこくしてはいけないわ。ご迷惑でしょ」

めぐるちゃんは不満げな顔をしながらも、やっと手を離してくれる。

「孫が迷惑かけて、ごめんなさい。あとできちんと言い聞かせるわ」

穏やかな声を響かせた老婦人が、大家の里子さんだろう。

七十代くらいに見えるが、春色のカーディガンがよく似合っていた。

グレイヘアを短く整えた彼女は、気品がある。

「百花さんね、もしかして挨拶に来てくれたのかしら」

「あ、はい……遅くなってしまっただわ」
「まあまあそんなこと。めぐる、チェリーの瓶を持ってきてちょうだい。食べごろだわ」

「うん！」

めぐるちゃんは部屋へ入っていった。

里子さんが、私に身体を向けてゆつくりと微笑む。

「はじめまして、大家の桜井里子です。私から挨拶に伺えば良かったのに、来させてしまっただけですわ」

「いえ、こちらから伺うべきことですから」

社交辞令は、非効率的と感じるときもあれば、それでスムーズにことが運ぶ場面も

ある。

里子さんが柔和に笑う。

「困ったことがあったら、いつでも言ってみてね。あと、忙しいのわかってるから。朝顔の世話、しなくて良いからね。私がやっておくわ」

「……え？」

「安芸君が百花さんに朝顔をプレゼントしたって話していて、私、叱ったのよ。そんな手間のかかるものを誰が初対面で贈るのよって」

里子さんは肩を落として、深くため息をついた。

「安芸君ね、海外暮らしが長かったせいかな、人との距離感を間違ってしまうことがあるというか……嫌な気分にしたのなら、本当にごめんさいね」

彼女の声から、申し訳なさが伝わってくる。

「百花さんのお部屋ね、長いこと空室だったの。それで安芸君、お隣さんができるのすごく楽しみにして……空回ってしまったみたい」

里子さんは眉を下げて困った笑みを浮かべた。

「嫌だったらもう、無視しても良いからね。無視されても仕方ないことしたわって私が言うから」

任せてと胸を張った彼女は、安芸さんの人の好き^よさを伝えつつ、私の側にも立ってく

れている。

なんて、気配りができる人なのか。

「そんな……無視なんてできません」

「そうなの？ 私ならしばらく無視しちゃうのに。優しいのね、百花さんは」

彼女のような思慮深い人に褒められると、素直に嬉しかった。

歳を重ねてこそ滲みでるお人柄に、こちらの緊張がするする解けていく。

「おばあちゃん、持ってきたよー！」

「めぐる、タッパーも持ってきてくれたの？ 気が利く子だわ」

「へへ〜」

戻ってきためぐるちゃんが里子さんにタッパーを一つと、赤い瓶詰めを一つ渡す。額を撫でられためぐるちゃんは顔を綻^{ほころ}ばせた。

「これ、私からの引越挨拶よ」

里子さんはめぐるちゃんが持ってきたものをすべて、私に手渡す。

受け取ったタッパーからカレーの香りが漂い、できたての温かさが手のひらに伝わってくる。

食欲をそそる香りにゴクリと喉を鳴らしてから、慌てて首を横に振った。

「いや、その……いただけません」

「本当は何か買って用意したかったのだけど……夫のお見舞いやめぐるの世話で、買い物もままならなくて」

里子さんの下がった眉に、情けなさが浮かぶ。

「手作りのもので、ごめんなさいね」

もし受け取らなければ、彼女は無理を押しして買い物に行けば良かったと、自分を責めるのかもしれない。断る方が失礼な気がする。

それに、このスパイスの匂いには抗あがえない魅力がある。私は長く逡巡しゆゆんした。

「あれ、モモちゃんどうしたの？」

黙り込んだ私に、めぐるちゃんが首を傾げる。

だが、里子さんが唇の前に人差し指を立てた。

「めぐる、会話は順番なの。今は百花さんの番よ」

「あ、そっか、ごめん」

めぐるちゃんも人差し指を立て、里子さんの真似をしながら私の返事を待つてくれる。

私は焦らずに自分で決め、頭を下げた。

「ありがたく、いただきます」

里子さんとめぐるちゃんが互いに顔を見合わせ、朗らかに笑う。

「もらってくれて、ありがとう。食べきれなかったら捨てて良いから」

「おばあちゃんのカレーは最高だよ。それにアメリカンチェリーのコンポートの瓶詰めは、めぐるも一緒に作ったの！ だからモモちゃん絶対食べてね！ 感想聞きに行くと！」

「こら、めぐる。自分の気持ちばかり押しつけるのは、気持ちの良い仲良しの仕方ではないのよ」

「えー、そうなの？」

元気なめぐるちゃんと、適度な距離感を保つ里子さんのやりとりは微笑ましい。

「楽しみに食べさせていただきます」

私はもう一度礼をして、静かにその場を辞した。

「モモちゃん、またね！」

タッパーと瓶詰めを抱え、またねと元気な声を背に受ける。

すると、胸のあたりがぼかぼかする。

嬉しさとも、懐かしさとも、戸惑いともとれる、織り混ざった何かが、あたたかかった。

夕暮れの陽の中、安芸さんのネモフィラが揺れているのを横目に家に帰る。

私の部屋では、今朝タイマーをかけておいた炊飯器が仕事を終えていた。

カレーの誘惑にかられて、テーブルの上にさっと白ご飯を用意する。そこにタッパを並べ、蓋を開ける。

すると、芳醇ほうじゅんなスパイスの香りが、小さな部屋にふわっと広がった。

「おいしそう」

お茶碗に盛った白ご飯の上に、スプーンひと匙さじ分のカレールーをかける。ルーの染みたご飯を口に運んだ。

私は目をパツと見開く。

「ん、おいしい！」

口の中に広がったターメリックの香り、鶏肉の旨味、白米の甘さ。

もう一口、もう一口とぱくぱく食べる。

「しかもほろほろ手羽元まで……！」

タッパの中には、カレールーが染みた鶏にわとりの手羽元が何本も贅沢に入っていて、手が汚れるのも気にせず食らいついた。

ほろほろ崩れる肉にスパイスの風味が相性抜群で、食べる手が止まらない。

いつも一杯しか食べない白ご飯を二杯も食べ終えて、やっと気づく。

「……お腹いっぱい」

毎日、冷凍おかずと白ご飯で、必要な栄養をとっている。

今日は食べすぎた。

けれど、久しぶりにおいしいものを食べたという感覚に満たされていた。

膨れたお腹に手を当てて椅子の背にもたれ、空っぽになったタッパを見つめながら、ふとお母さんを想う。

「お母さんとカレー屋さん、よく行ったな……」

今はもう閉店してしまった、実家の近所にあったカレー屋さんを思い出す。

子どものころ、お母さんと夕暮れの陽の中で手を繋いで、ログハウスの小さなカレー屋さんまでの道のりを歩いた。

『百花、今日はどのカレーを食べる？』

『カリカリのナンが良い』

『百花はあれ好きよねえ。サラダセットにしましょう』

あの道で繋いだ手は温かで、お母さんは私を見て笑っていた。

お母さんはシングルマザーで、多忙な営業職だった。

私を育てるために稼ぐと決めた母は、食事を全部、外食にしたのだ。

栄養の偏りも考慮して、野菜も添えて注文するよう教育されている。

食事を作らない母。

それが悪いことだと思ったことは、一度もない。

お母さんは料理に割く時間を省く分、私とたくさん話をしてくれた。効率的に判断して、私を大切に育てあげた彼女を尊敬している。

小さなカレー屋さんの二人席で向かい合って座り、お母さんと一緒にカレーを食べる時間が好きだった。

『百花、今日は学校でどんなことがあった？』

『テストで九十八点だったの、悔しい……もうちょっとで百点だったのに』

『よくがんばったじゃない！ できなかったことじゃなくて、できたことに目を向けた方が楽しいよ？』

今はもういないお母さんの声が、何気ない会話が、私の耳の中で再生される。

『お母さんの……声』

嫌な声ばかり思い出す、私のリフレイン。

『今日もがんばったから、カレーおいしいね、百花！』

けれど今、お母さんの声を鮮明に思い出すことができ、この体質に励まされた。目に涙が滲んだけれど、静かにのみ込んだ。

深く息をついて、長屋の古い天井を仰いでつぶやく。

『今日もがんばったから、カレーおいしかったね……百花』

里子さんのカレーのおかげで、お腹も、欠けていたどこかも、満たされた。



今日も定時で終わった仕事の帰りに、スーパーへ寄った。

普段なら一週間に一度しか買い物はしない。

だが今日は、寄り道だ。

回覧ノートのある話題が、気になってしまったからだ。

スーパーの中を歩き回りながら、今朝のことを思い返す。

私は自室で朝食をとりながら、回覧ノートを読んでいた。

『ナメクジ許さない。／軽井沢へキャンプに行っコンポート食べた。最高。安芸』

『通院が面倒。／アメリカンチェリーのコンポートを炭酸水で割るとうまい。時雨』

『推し配信リタイできず。／コンポートはスパークリングワイン割り。ユリ』

『膝が痛みます。／アメリカンチェリーの瓶詰めが食べごろです。里子』

『天文部のアニメ終わった。／チェリーのコンポートかけたアイス好き！めぐる』

回覧ノートの内容が、アメリカンチェリーのコンポート一色だったのだ。

どうやら里子さんが手作りのものを、長屋の全員に配ったようだ。

回覧ノートを読んだあと、私は一人用テーブルの上にあるアメリカンチェリーの瓶

詰めを見つめた。

「私は、どうやってこれを食べよう……」

片手にアメリカンチェリーの瓶を持ちながら、回覧ノートを眺めっているとふっと笑ってしまふ。

「これだけ長屋で流行はやっているのに。みんな好きなことを言うだけで、誰も共感しないの、面白いよね」

でもここに書かれたことはたしかに、共有されているのだ。

回覧ノートに何を書いたか忘れたところに、たまたま部屋の前で顔を合わせて「そういえばあの話ね」なんて、めぐるちゃんや里子さんが話しかけてくる。

そのゆったりとした、忘れたところにやってくる時間差の共有が、不思議な感覚だった。人と「間ま」がズレがちな私にとっては、助かる距離感なのだ。

けれどお隣の安芸さんは、顔を見るとすぐ、私が回覧ノートに書いたことについて話しかけてくる。

もう少し間を置いてほしい。

私は夕方のスーパで、何を買おうか迷いながら足を進めた。

いつもならスーパで買うものもルートも、大体決まっている。だが今日はあっちこっちとろうろする。

立ち読みサンプル はここまで

「何にしよう」

パンコーナーの棚の前で、右往左往うきさきして悩む。

「アメリカンチェリーだから、ヨーグルト、アイス、いやスパークリングワイン……バゲット？」

「こんがり焼いたバゲット良いよね。チェリーのコンポートにすっごく合うよ」

私の独り言にいきなり返事が届く。

ヒツと身を硬くして後ろを向くと、安芸さんが立っていた。

「あ、安芸さん……」

彼は今日、土で汚れていなかった。

開襟かきえの黒シャツと黒のスラックスで、前髪もきちんと分けている。

そのおかげで、意外と整った顔が露出していた。

服は汚れていない方が良いが、顔は前髪でやや隠れている方が私は落ち着くなと思う。

「百花さん、おかえり」

スーパで会ったときに気を悪くさせない返答は、とまた考えているうちに、安芸さんはパンの棚を指差した。

「アメリカンチェリーのおともを探してるんだよね？ ここのパンも悪くないけど、